「達人」の外国語学習履歴に関する質的研究: 外国語学習のオーラルヒストリー分析

A Study on Successful Learners of Foreign Languages

那須　雅子

岡山大学　言語教育センター

Masako NASU

Language Education Center of Okayama University

Abstract

This paper explores the experiences of successful foreign language learners. First, based upon the experiences of the masters of English in the past, the importance of reading extensively authentic English materials such as English literature is discussed. Second, the author analyzes her own personal interviews with contemporary masters and successful learners of English, Chinese and Japanese as a foreign language and attempts to identify the effective ways they have used in common in their language learning. The 'oral histories' of advanced level foreign language learners are used to consider how extensive reading and extensive listening help them to become competent bilinguals who can use more than one language practically, skillfully and strategically. Some testimonies also report that reading graded readers is quite effective especially for the intermediate learners.

1. はじめに

本稿では、第二言語を高度なレベルにまで習得した「達人」に対して実施したインタビューの分析結果を紹介し、この成功例が示す教育的示唆について考察する。特に日本語と英語の間に必然的に存在する言語および文化的相違を「達人」が如何に克服しているかに焦点を当てる。まず最初に、明治・大正期の英語達人の中から、新渡戸稲造と岡倉天心の学習履歴を紹介する。次に現代の外国語学習の達人・成功者が実践した学習履歴を、筆者が収集したインタビュー記録の中から紹介し、多読・多聴などの具体的な学習法の有効性について論じる。さらに「グローバル人材」として活躍するためには外国語を用いて「話す力」と「書く力」は必須と考えられるが、このような発信力を身に付けるために有効な学習法について、現代の「達人」の実体験に基づいて考察を加える。

2. 明治・大正・昭和初期の「達人」たち

日本では江戸時代に生まれ、開国直後から明治・大正・昭和初期にかけて活躍した先人の中から驚くべき英語力を習得した「英語達人」が輩出されている。国際連盟事務局次長を務め『武士道』(*Bushido: The Soul of Japan*)(1905)の著者としても名高い新渡戸稲造(1862-1933)や、アーネスト・フェノロサとともに日本美術復興に尽力し、『茶の本』(*The Book of Tea*)(1906)の著者で、日本美術院を創設した美術思想家の岡倉天心(1862-1913)などである。彼らが実践したとされる英語習得の履歴は、『英語達人列伝』(斎藤 : 2000)に報告されているが、その著者である斎藤は、別の著書の中で、先人たちの英語習得における多読の重要性を強調している。

> 英語達人たちは、修業時代のどこかで例外なく大量の英書を読んでいる。逆に言えば、英書の多読は英語達人になるための必須条件だと言ってもいい。達人レベルを目指さないまでも、英書の多読なくして高度な英語力の養成はありえない。(斎藤 2003: 88)

新渡戸稲造は、6 歳～8 歳でかかりつけの医者からアルファベットを習い始め、私立の英学校では毎日英語を 2 時間勉強し、11 歳で東京外国語学校に入学後は多読を実践した。数日に 1 冊の英書を読んだとされる。岡倉天心は、6 歳～7 歳でヘボンの塾において宣教師から英語を習い、9 歳で長延寺において住職に漢学を学びながら、高島学校では英学の勉強を続け 11 歳で東京外国語学校に入学した。15 歳で東京大学に進学し『レ・ミゼラブル』の英訳を読んだ。また 17 歳の時、英語で卒業論文『美術論』を 2 週間で書いたとされる。19 歳の時に長男が誕生し、一晩に一話英書の小説を日本語に要約して語り聞かせたとされる。22 歳では、アーネスト・フェノロサや米国の美術収集家の通訳を務めた。これら 2 人の英語達人に共通するのは、「多読」すなわちオーセンティックな英語を大量に読んでいることである。過去の英語達人たちは、英語の読書の質と量ともに高度なものであったようである。

日本語と英語の両言語をともに高度なレベルにまで習得し、それを維持することは並大抵のことではないが、その難しさの一端も歴史的人物の経験からうかがい知ることができる。江戸時代に活躍した通訳に、中濱萬次郎(ジョン万次郎)(1827-1898)がいる。萬次郎は、1841 年 14 歳のとき捕鯨船に救助されてから、1951 年に彼が 21 歳で日本に帰国するまでアメリカに滞在し、英語を身に付けたとされる。1951 年のペリー来航以降、アメリカと幕府との交渉時に活躍した。しかしながら、英語を使う機会を失った彼の英語力は、晩年アメリカ人が彼を訪れた際には意思疎通が困難なほどに低下していたという。また女子英学塾(現津田塾大学)を創立した津田梅子(1864-1929)は、1971 年に岩倉使節団の一員として 6 歳で渡米し、17 歳で帰国した。彼女も高度な英語力を習得する一方で、日本語力を習得する機会を得られなかったようである。日本語を母語とする日本人にとって、文字の種類から言語的特徴、意思疎通の文化的側面まで全く異なる英語を完全に習得し、維持することは至難の業である。

3. 現代の「達人」に学ぶ

先人たちの英語習得において大量の英書が読まれていたことを紹介したが、彼らの生きていた時代の環境では、英書が英語学習の素材として最も手に取りやすいものであったであろう。現代では、書物だけでなく様々な英語素材が身近に存在する。 音響機器やマルチメディア機器が高度に発達し、様々な新しい学習スタイルが実践されている。さらには、国内でも外国語のネイティブスピーカーと触れ合う機会が身近なものとなり、海外留学者も大幅に増加するなど外国語習得を取り巻く環境は大きく変化した。そこで本稿では、現代の外国語学習の達人、すなわちターゲット言語習得の成功者がどのような学習法を行っているのかについて、彼らに対して実施したインタビューを考察・分析し、彼らの学習履歴と過去の日本の英語達人が行った学習法との比較分析を行いたい。

3.1 先行研究

日本人学習者の第二言語習得を対象にした質的研究はまだ少数である。主な先行研究の一つである斎藤 (2000; 2003) は、文献資料に基づいて過去の日本人英語学習の成功者＝「達人」の学習法を調査し研究を行っている。一方、竹内（2007; 2010）は、現代の英語「達人」を対象にしたインタビュー分析に加えて、その分析をアンケート調査のデータ分析とも照合させており、本分野の質・量的研究として重要である。また、特定の学習法の検証に特化した研究としては、Umino (2005) があげられる。Umino は、日本人学習者 20 人にインタビューし、ラジオ・テレビ語学番組を利用した長期にわたる自主学習に関する調査を行っている。さらに、鳥飼 (2007) は、語学習得に関するオーラルヒストリー研究の理論と手法を考察し、先駆的な通訳者 5 人のオーラルヒストリー記録を詳細に分析している。

3.2 質的研究の手法と目的

インタビュー形式で行われる「オーラルヒストリー研究」は、主に歴史研究分野において 1990 年代以降注目され、歴史上の事件などに関して当時の関係者から直接話を聞き取り、記録としてまとめる研究手法として　組織的に取り組まれている。この手法を外国語学習に転用したのが、「英語学習版オーラルヒストリー研究」である。学習成功者のインタビュー分析を用いた質的研究の利点は、学校教育の中だけでなく個人的に実践した自主学習や海外滞在経験なども含めて外国語学習のトータルな履歴を分析対象にできることである。すなわち、多数の被験者を対象とするアンケート調査や、クラスルームを対象にしたテストスコアの比較分析などの量的研究では必ずしも明らかにできない領域を取り扱うことが可能になると言える。インタビューを用いた質的研究を英語教育に応用する目的は、選択式アンケート等では見えにくい、広範囲で踏み込んだ外国語学習の実態をより正確に把握することである。

英語学習版オーラルヒストリー研究の利点として、次の 2 点があげられるだろう。まず、「成功者（達人）の声」に焦点を当てることが可能になることである。秀でた英語運用力を学習を通じて身に付けた成功者の実体験の調査では、大多数の平均値を探るような研究では埋もれてしまいがちな少数の有益な実体験および学習法を明らかできる。ある世界を熟知しているインフォーマントを数名取り上げるような研究は、知識のない 1 千名を統計調査するよりはるかに代表性がある(Plummer: 2001)と言われる所以である。2 点目は、「長期的な視点」の研究が可能な点である。そもそもオーラルヒストリー研究は、対象者の長期間にわたるライフヒストリーを語ることであり、その手法を英語教育に応用することにより、学習者の長期的な学習過程が研究対象になってくるのである。

本研究で用いた質的研究の手法は、外国語学習の成功者である「達人」の外国語学習体験を詳細に語ってもらい、その口述記録を研究素材として分析するというものである。

3.3　達人の定義とインタビューの実施

本研究においては、「達人」をどのように定義するかが重要な問題となる。「ネイティブスピーカーのようにその言語を話す」、「きれいな翻訳ができる」、「国際社会において不自由なく外国語を使用している」など様々な定義が考えられる。例えば、竹内（2007）は、以下の 6 の条件を満たすものを達人の定義としてあげている。

① 学習対象の外国語が日常的に話されていない地域で生まれていること
② 12 歳ごろ以降にその外国語の本格的な学習を開始していること
③ 主として日本でその外国語を学習し、留学経験があるとしても時期的には遅く豊富ではないこと
④ 家庭環境において、その外国語の使用が日常ではないこと
⑤ 現在はその外国語を使う仕事をしていること
⑥ その外国語の能力が「きわめて高い」と判断を下す材料があること

本研究では、達人を定義する条件を少なくし②③⑤をはずした。様々な学習環境や履歴を持つ学習者を視野に入れ、多様化している現代の英語学習の状況をとらえていくことにした。②については、現在では小学校に英語教育が義務化されたことから早期に英語学習を開始する日本人が増加している、③については、留学経験が小・中学生または高校生など時期的に早く、また数年にわたる豊富な経験があっても英語習得あるいは英語力の維持に成功している者ばかりではない、⑤については、まだ社会に出ていない学生の中に、英語習得に目覚ましい「達人」が居る、という理由からである。

したがって、本研究における外国語の「達人」は、(1) 学習対象の外国語が日常的に話されていない地域で生まれ育っていること (2) 家庭環境において、その外国語の使用が日常ではないこと (3) その外国語の能力が「きわめて高い」と判断を下す材料があること、の 3 条件を満たしているものとした。母語は、無意識のうちに日常生活の中で習得し、学校教育でそのレベルを高めていくものであるが、外国語は、その習得には「意識的な学習」が不可欠であり、何らかの形でこの「意識的な学習」を実践して高度な外国語を習得した者を、本研究では「達人」と定義している。

インタビュー実施期間は平成 23 年 3 月～平成 25 年 12 月であり、対象者は 32 人であった。その内訳は、日本人が 28 人でその他の国籍 4 人であった。日本人の内訳は、社会人 5 人・大学（院）生 18 人・高校生 1 人・中学生 4 人で、そのうち、海外滞在歴なしが 16 人、海外滞在歴ありが 12 人であり、海外滞在期間は 1 年程度が 3 人、それ以上長期が 9 人であった。

3.4 インタビュー分析と考察

今回のインタビューの中より、多読と多聴の有益性を強調する達人・学習者が多いことがわかった。まず 26 歳で初めて来日したアメリカ人A氏の学習歴を見てみたい。A 氏は、日本に来てから日本語を学習し始めたが、日常会話には支障がなく、敬語や謙譲語を用いた丁寧なビジネス文書も読んで書く

ことができる。また日本語で著者出版をしているが、日本語ネイティブのチェックでも、修正が入るのは、いわゆる「て・に・を・は」のレベルだけであった。A 氏はまず外国語としてロシア語を学び、そのロシア語学習の成功体験から、外国語学習に多読が有益であると語っている。

> インタビューA（1）
> 多読の経験が役に立ったという先生の話を聞いて、ロシア語の文学を読みたかった。…ロシア語を読もうとする時に、まず知らない単語が出てくると辞書を引く。１ページぐらい読むには 30 分から 1 時間ぐらいかかって、知らない単語がいっぱいあって、それで挫折してしまう。…では辞書を使わないでたくさん読もうと思って、それから 1 年か 1 年半ぐらいの間に、19 世紀、20 世紀のロシア文学、主に小説をたくさん読みました。最初はやっぱりほとんどわからなかった。でも、授業も受けたし、それで体系的に語彙も覚えようとしていた。語彙を単語カードに書いて暗記しようとしていましたので。語彙を暗記しながらたくさん読むと相乗効果があって、いわゆる使用頻度が高い単語が小説の中に繰り返し出るから、文脈の中で見てそれはわかるようになった。結局 1 年後は、もうトルストイの『戦争と平和』とか、そういう 19 世紀の大作いろいろ読みました。

さらに、「文学を読む」ことの意義について述べている。文学作品は「物語性がある」という点、「語彙が非常に豊富である」という点、新聞などには出てこない口語や日常生活で用いる言葉など、「制限なく（あらゆる種類の）言葉を学ぶことができる」などの利点が指摘されている。文学作品には「言語文化を理解するために役立つ面がある」点も強調された。またその言語を母語とする国民の価値観や考え方、行動の理解にもつながる点も文学作品の有益性であると強調する。

> インタビューA（2）
> 日本語はできるようになっても、日本人がどういうふうに考えているかということは、わからなかった。例えば、ある人が自分の人生の中で、親が年をとって病気になって介護しなければならないという場面が出てくると、それをどういうふうに考えるか。…それに関する文学作品を読むと、日本人はそういう問題についてどう考えているかがわかってくる。「死（death）」についてどういうふうに考えているかということは、作家が想像して登場人物を作って、その人の考えていることも描写している。本当に親しくないと、そういう重要な問題について人は話さないので、そういう意味で文学作品、日本の特に現代の文学作品を読むのは役に立ったと思う。

以上は、日本語達人として上級レベルの高度な日本語を使用するアメリカ人の体験である。上級レベルの達人になるには、特に文学などの原文の多読が有効であることが証言されたが、一方、教材が何であっても多読が有効である点に触れる達人・学習者も多い。これは、多読を行う素材が、必ずしも、文学教材や原文である必要はないという示唆である。

B 氏は、インタビュー実施当時大学 4 年生で海外滞在経験はない。TOEIC スコアが、2010 年春に 615 点（L325:　R290）→2011 年 5 月に 780 点（L410:　R370）と約 1 年間で 115 点の上昇があった。

Graded Readers を大量に読むことを授業で指導され、それを自主学習でも実践して英語力のアップに成功した。（Graded Readers は英語学習者向けに作られた本で、使用する主要な単語を制限し、全体の語数や構文などの文法事項を調整している多読用の書籍である。）

> インタビューB（1）
> 易しいものをたくさん読んで 100 万語以上を読んだ。通学２時間のうち、１日に 3 時間、約 5 か月（～2011 年３月）の読書で 100 万語（144 冊）を超えて 160 冊読んだ。読んだのは１日で読み切れる１万語前後の本が多い。多読は、今までで一番合っていた勉強法です。

B 氏が読んだのは、レベル分けされ学習者用に利用されている Graded Readers である。多読は素材が何であれ有効であることを示している。さらに、B 氏は、大量に読むことから聴くスキルや話すスキルへの効果が感じ取られたと語っている。

> インタビューB（2）
> （多読により）発音が良くなった。声に出して読めるようになった。長い文章でも、ここまでで、目がストップする場所がわかるようになった。ストックがたまってそれが出てくる感じ。電車の中では、黙読だったけれども、スピーキングの練習を全くしてないんですけど、多読でポロっとでるようになった。多読でいっぱい読んで、文章が蓄積されてきて、それを出すのは割と簡単です。読むのは速くなった。リスニング力も多読で向上した。

Graded Readers を大量に読むことにより易しい語彙や表現に触れるため、それらの言葉の蓄積は「話すスキル」へ繋がる効果があると言えるかもしれない。B 氏は、まだ「達人」のレベルに達する途中段階であるが、これらの「達人予備軍」から得られる示唆は大学教育あるいは中学校、高校の英語教育を考える上で参考になる内容である。新聞ニュースにしても文学作品にしてもいきなり英書の原文は難解であるが、B氏の例より難易度の低い素材を大量に読むことから徐々にレベルを上げていくことは有効であると考えられる。

さらに「達人」１人および「達人予備軍」の１人のインタビューの中から、多読の効果についての証言を紹介する。C 氏は、高校卒業後にアメリカの大学で 4 年間学び、その後 1 年間現地企業に勤めた経験があり、日本に帰国後は英会話講師として勤務している。C 氏は TOEIC スコア 990 点(満点)を取得している。

> インタビューC
> 日本語でも読書が好きで、英語でも洋書を読む。ペーパーバックを大量に読んで、帰国後に英語学習の成果が出た。

D 氏は、インタビュー当時は高校１年生であったが、その後有名大学に進学している学生である。D 氏は、6 歳～11 歳の時に米国滞在経験があり、帰国して猛勉強を重ねて中学 3 年生で英検１級を取得した。

インタビューD
米国滞在している際に、現地小学校で絵本など洋書を読んで感動し、読書が好きになった。帰国後にもペーパーバックなどの読書を続けて英語力を向上させた。

C 氏と D 氏の海外滞在経験は 5 年という長期間にわたるものなので、海外滞在経験を持たない学習者には参考にならないとの指摘があるかもしれない。しかしながら、確かに、海外体験によって語学力が伸びたということはあるにしても、帰国後の意識的な学習、すなわち大量の読書をすることにより、それぞれの語学力が維持されるとともに、さらなる飛躍的な伸びをもたらしたのであって、海外滞在歴そのものが高い語学力につながると安易に考えるのは拙速であろう。5 年という長い海外滞在経験があればすべての人が高い語学力を身に付けているわけではないし、それを維持できるのは少数のケースだからである。

次に、多読が有効であることを語る「達人」や「達人予備軍」が、英語を大量に聴いてインプットする「多聴」の教育的効果について語っている例を紹介する。E 氏は、英文学を専門とする大学教授で文学作品の翻訳を数多く出版している。中高生の時より英語が極めて得意で、英検 1 級に高校 1 年生で合格し、その英語運用能力は日本の大学の英語関係者の中でも名高い。インタビューの中でこの達人は、耳を鍛えることの重要性を強調した。

インタビューE（1）
中学生の時、毎日、ラジオ番組で沢山英語を聴きました。耳を鍛えるのは大事です。… いわゆるコミュニカティブな英語教育は、（効果が出るまで）徹底的にやるべきです。

英検 1 級の合格レベルは高校 1 年生で学習する語彙の範囲を超えているが、その豊富な語彙習得もテレビの英語会話を聴くことを通じて身に付けたとのことである。番組は、かなり教養ある英語スピーカーが登場し、幅広く奥深い内容で構成されており、使用されている英語のレベルも高度なものであったようである。

インタビューE（2）
テレビ番組の中では、国弘正雄さんが出てきてトークショーと言って、いろいろな日本で活躍している英語圏の人、企業の社長さんみたいな人もいました。アイルランド系のイギリスの作家でアイリス・マードックという女性作家や、エドワード・ジョージ・サイデンステッカーという日本文学の翻訳者の人も呼んできました。

ラジオやテレビを通じて幅広い生の英語を聴き、耳からの大量のインプットを徹底的に行っていた E 氏は、高校２年生で初めてイギリスにホームステイした際には、現地のファミリーとのコミュニケーションにはほとんど困らなかったそうである。

また同じく多聴の重要性を強調したのは、世界を舞台にビジネス界で活躍する F 氏である。高校卒業後に渡米して大学時代をアメリカで過ごし、高い英語力を習得した。日本での高校時代には英語の

成績は中位であったが、アメリカ滞在中に一般家庭にホームステイし、テレビを見ながら大量の英語を聴くことを通じて英語力を高めていった。

インタビューF（1）
さんざんテレビをずっと見ていました。自分の興味のあるものからスタートすればいいと思います。コメディーでも映画でもスポーツでも 24 時間英語漬けみたいな状況で聴きます。聴く時間というのは非常に大事です。

アメリカで放映されているテレビ番組を自然に理解するようになるのは容易ではないと考えられるが、英語に触れる日常生活を送ると同時に、F 氏は大学へ通いながら英語で授業を受け、英文を書いたり課題をこなしたりして語彙を増やしている。その両者の相乗効果があったと考えられる。またテレビで英語を聴く際には、辞書を引くことを実践していた。テレビを見ながら、あるいは日常生活の中でも辞書をまめに引くことで、語彙を増やすことに努めたとのことである。

インタビューF（2）
テレビを見ることと、分からない時は発音で辞書を引く。辞書は必ず持っていて、常に引いて丸を付けました。違うことを調べていても、丸を付けた時に何を調べていたんだろうなと、忘れていたのをまた思い出すということで、語彙を意識的に増やすことをすごくやりました。ほとんど辞書と友達みたいでした。

「多読」と「多聴」の重要性を語っている「達人」の学習履歴を紹介してきたが、最後に何よりも「話すこと」の重要性を強調した G 氏のインタビューを紹介する。G 氏は、TOEIC 955 点、TOEFL iBT 102 点、英検 1 級を取得している。 インタビュー当時には、東京外国語大学 4 年生であり、また同時に大学院 1 年生に相当する英語教育学特化コースに在籍していた。G 氏は、幼少時の海外経験を複数回有しており、ハンガリーとオーストリア（4 歳）、スイス（7 歳）、オーストラリア（8 歳と 10 歳）など、両親の出張に同行してそれぞれ短期間ながら海外滞在をしている。この海外経験から、G 氏は英語は話すためのものとしてずっと学習を進めてきた。

インタビューG　(1)
初めてハンガリー、オーストリアへ母の学会で行ったのが、4 歳の時です。これは 1 週間ほどで、この時に親が「Sorry」とか「Thank you」とか言っているのが初めて聞いた外国語でした。旅行経験を通じて自分と違った世界というか、違った言葉を話すというのが自分の中にすんなりありました。そして中学受験の後から高校 1 年生まで英会話学校に通い続け、「話すための言葉だ」という意識は自分の中では結構ベースになりました。

さらに、その後、高校 1 年生でアメリカ留学をすることになるが、その前後の期間には在学していた日本の中高一貫校で、ESS に所属し英語劇の練習に取り組んできた。その中で、英語を話すという経験を英語ドラマの中で特訓した。

インタビューG　(2)

これ（英語ドラマの練習）は英語力にかなり影響があったと思います。台本の英語セリフの表現を知らなくても、日本語が隣に書いてあることが多かったので、なんとなくこういうことを言っているというのがわかりました。ネイティブがしゃべっている英語の表現がそのままドンと与えられて、それを先輩たちが練習しているのを何度も、何度もその場で見たり聴いたりしました。身振りも入り、言葉も入りというので、そのまま演技を見て言葉を学んだという感じです。そこで、感情を英語で表現する何かコツみたいなものを若干教わりました。感情を伝わりやすくする、言いたいことをどういうふうに言ったら伝わりやすいかというのを学んだ気がします。

G 氏は、ESS という部活動の英語演劇という‘疑似的’かもしれないが、英語を用いる環境の中で「話す」ことを通じて英語の発音や調子、そして高度な表現を身に付けたケースである。もちろん、G 氏の学習履歴には、中学校、高校での文法学習や語彙習得、読解演習などを通じた英語の基本事項の定着がある。その基礎力の上に、「話す」訓練が積み重なっているのである。アメリカで 1 年間を過ごした経験は過小評価できないが、その海外経験に加えて、彼の「話す」ことへの高い意識付けと実際に英語セリフを「話す」訓練の成果が、高い英語力の習得につながっていると考えられる。

4. 結び

本研究では、筆者が実施したインタビューの中より、多読と多聴の教育的効果に焦点を当て、その学習履歴を紹介した。多読の効果を強調した証言からは、多読は、必ずしも、先人たちが実践したような文学教材や原文である必要はなく、教材が何であれ大量に読むことが有効であるとする教育的示唆が得られたと考えられる。そして、Graded Readers などの易しい教材も有効であり、大量に読むことが話すスキルの上達にもつながる可能性に関しても論じた。一方、多聴の教育的効果に関しては 2 人の学習履歴を紹介し、英語を聴く際に、聴き流すのではなく辞書を徹底的に用いることの重要性についても考察した。本研究で示した教育的示唆に関しては、引き続きインタビューの実施とその質的分析等、今後さらなる研究が必要であると考えられる。

引用文献

斎藤兆史 (2000).『英語達人列伝』東京：中公新書.
斎藤兆史 (2003).『英語達人塾』東京：中公新書.
竹内理 (2007).『「達人」の英語学習法』東京：草思社.
竹内理 (2010 [2003]). 『より良い外国語学習法を求めて：外国語成功者の研究』東京：松柏社.
鳥飼久美子 (2007). 『通訳者と戦後日米外交』東京：みすず書房.
トンプソン・ポール著・酒井順子訳 (2002).『記憶から歴史へ　オーラル・ヒストリーの世界』東京：青木書店.

中野卓・桜井厚 (1995).『ライフヒストリーの社会学』　東京：弘文堂.
ベルトー・ダニエル著・小林多寿子訳　(2003).『ライフストーリー　エスノ社会学的パースペクティブ』東京：ミネルヴァ書房.
御厨貴編　(2007). 『オーラルヒストリー入門』東京：岩波書店.
吉村俊子・安田優他編　(2013).『文学教材実践ハンドブックー英語教育を活性化するーLiterature as Inspiration in the English Language Classroom』 東京：英宝社.
Plummer, K. (2001). *Documents of Life 2: An invitation to a critical humanism.* London: Sage.
Umino, T. (2005) Learning a second language with broadcast materials at home: Japanese students' long-term experience. *Learners' Stories: Difference and Diversity in Language Learning*. Eds. Benson, P. & Nunan, D. Cambridge University Press.